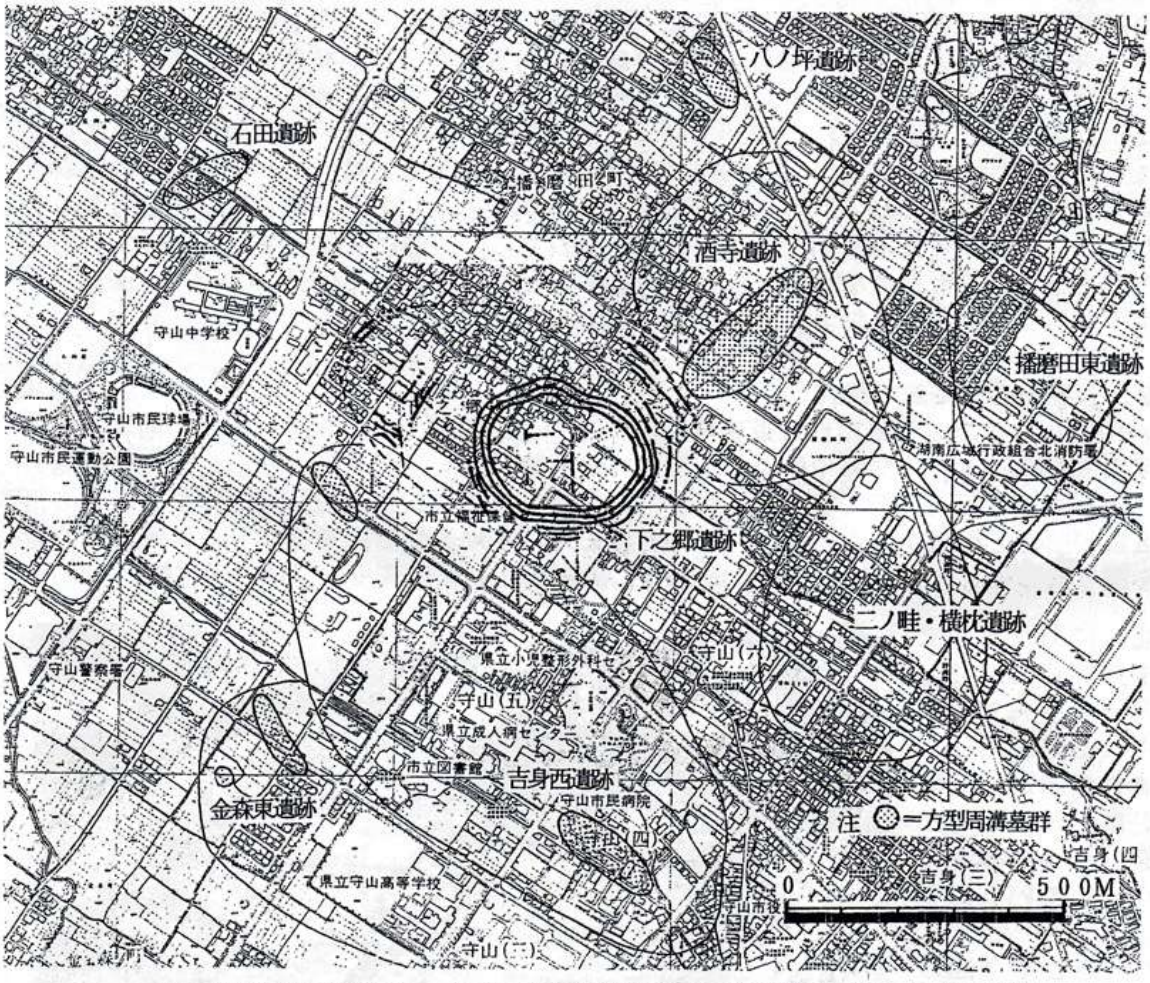
史跡下之郷遺跡発掘調査

現 地 説 明 会 資 料

== 第55次発掘調査の速報 ==



周辺遺跡地図 （下之郷遺跡の環濠と墓の位置）

平成16年12月11日

守山市教育委員会

遺跡名　　：　下之郷遺跡（しものごういせき）第55次調査
調査地　　：　守山市下之郷町631-2の一部
調査面積　：　約　７００㎡
調査期間　：　平成16年9月25日から同年12月中旬まで（予定）
調査目的　：　重要遺跡範囲確認調査

１、はじめに

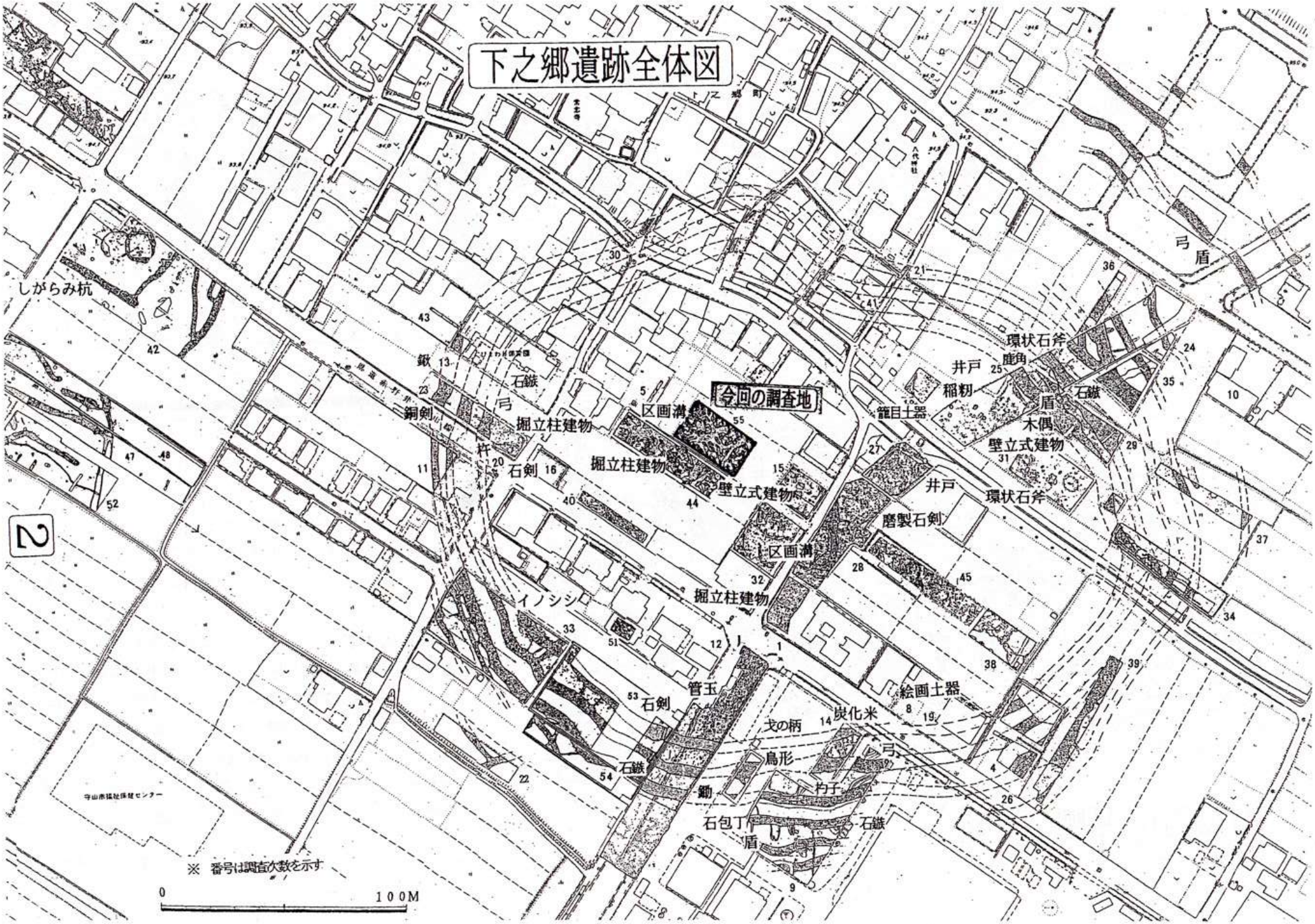
下之郷遺跡は、1980年に行われた市の公共下水道工事の際に発見された遺跡で、これまでに54次の発掘調査が行われてきています。これまでの調査を振り返ると、1983年に行われた都市計画道路建設に伴う調査で、大溝３条が発見され、また翌年の調査でもそれに続く３条の大溝が確認されたことで、この遺跡が弥生時代中期後葉（約2100年前）の環濠集落であることがわかりました。その後、遺跡範囲の内外で調査が繰り返され、1994年の下水道工事にともなう調査で集落跡の北側環濠３条が発見され、環濠の周回する範囲がわかるようになりました。そして、1996年には集落北西部で堅固な柵や門柱が築かれた出入口が発見され、1998年には、集落北東側に8～9条もの環濠が掘られていることが判明しました。また、2000年に実施した第42次調査では、これまで集落の西端と考えられていた場所のさらに、約100m西側で大溝とともに井戸や建物跡が発見されました。このことから集落西側では、３条の環濠のさらに外側にも居住域が広がっていることが推定されるようになり、集落の全体規模は東西約670m、南北約460mで、面積はおよそ25ヘクタールにもおよぶことが推定されます。

２、環濠集落中央部の調査

1998年に実施した都市計画道路建設に先立つ発掘調査では、集落中央部で南北方向の区画溝が発見され、内部や周辺から掘立柱建物跡がたくさん見つかり、集落の中枢施設を囲む方形区画（内郭）ではないかと推定されました（27次調査）。その後、この方形区画の所在を明らかにするため、空中写真を用いて地形復原図を作成し、区画溝の位置を探る確認調査をすすめました。2002年に実施した44次調査では、建物の主軸がほぼ南北軸にあたる独立棟持柱建物が集落のほぼ中央で発見されるとともに、建物の周囲には溝が掘られ、その一部が東側の隣地につづいている様子がうかがえました。そこで今回の調査では、この溝がいったいどの方向に伸びるのか、そしてこの溝が周辺の建物とどのような関係にあるのかを確認するために調査を実施しました。

集落の中央部で発見された区画溝と建物跡（27次調査）

下之郷遺跡全体図


しがらみ杭
鍬
石鏃
弓
銅剣
掘立柱建物
区画溝
今回の調査地
杵
石剣
掘立柱建物
壁立式建物
イノシシ
区画溝
掘立柱建物
管玉
石剣
石鏃
鋤
石包丁
盾
石鏃
戈の柄
鳥形
炭化米
弓
杓子
絵画土器
磨製石剣
井戸
環状石斧
壁立式建物
木偶
盾
稲籾
井戸
鹿角
環状石斧
石鏃
籠目土器
弓
盾
N
※ 番号は調査次数を示す
0
100M

検出された建物

(建物 A)　1 間×3間　　梁行 2.8m　×　桁行6m　＝ 床面積 16.8 ㎡

(建物 B)　1 間×6間　　梁行 3.6m　×　桁行 9.8m　＝ 床面積 35.8 ㎡

※少なくとも 2 回以上の建替えが認められる。

(建物 C)　1 間×3間以上　梁行 3.4m　×　桁行5m 以上

※少なくとも1回以上の建替えが認められる。

(建物 D)　壁立式平地建物　　直径4mの円形　　床面積 12.6 ㎡

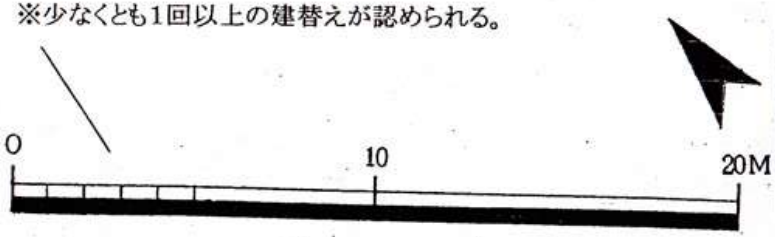
(建物 E)　壁立式平地建物　3.6m　×　8m の長方形　床面積 28.8 ㎡

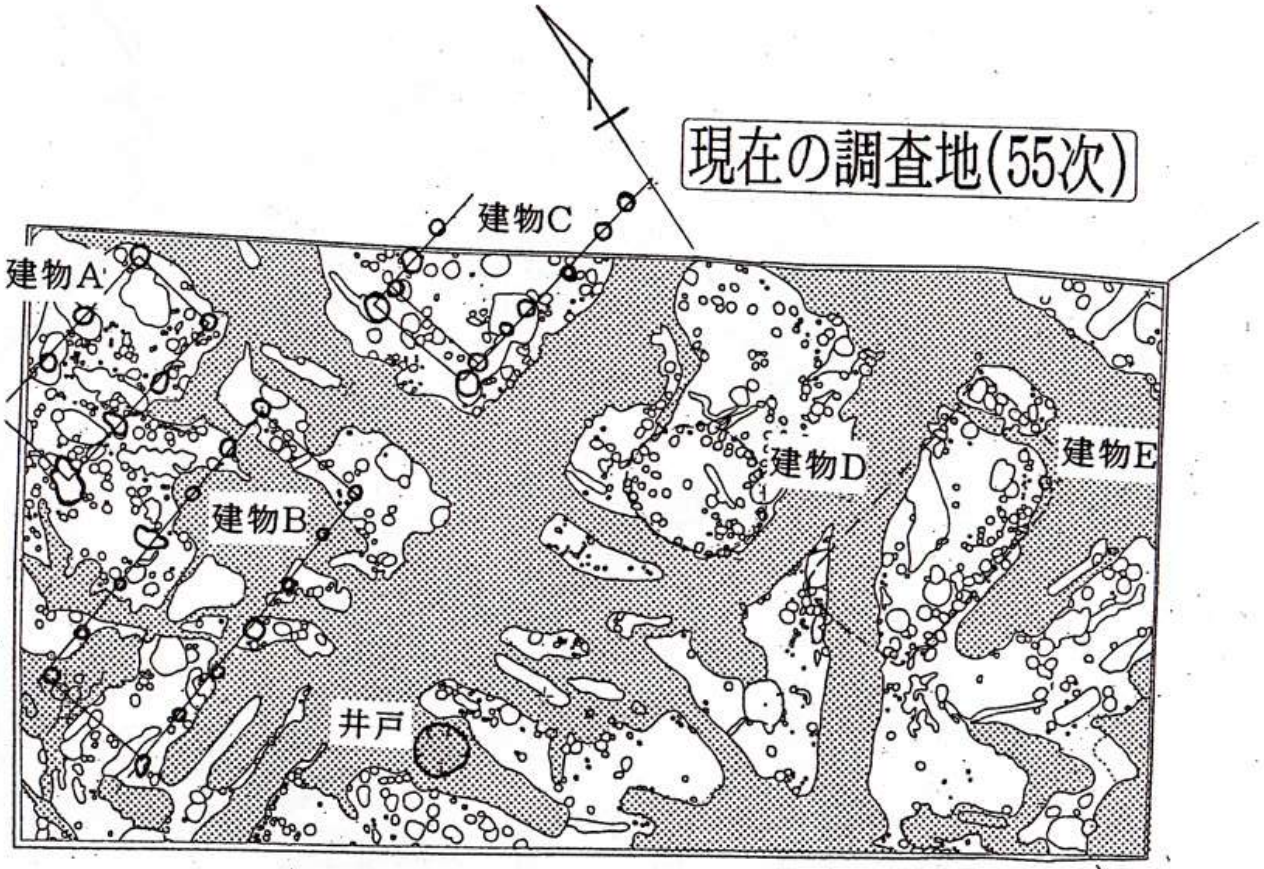
(建物 F)　1 間×6間　　梁行 3.9m　×　桁行 14.2m　＝ 床面積 55.4 ㎡

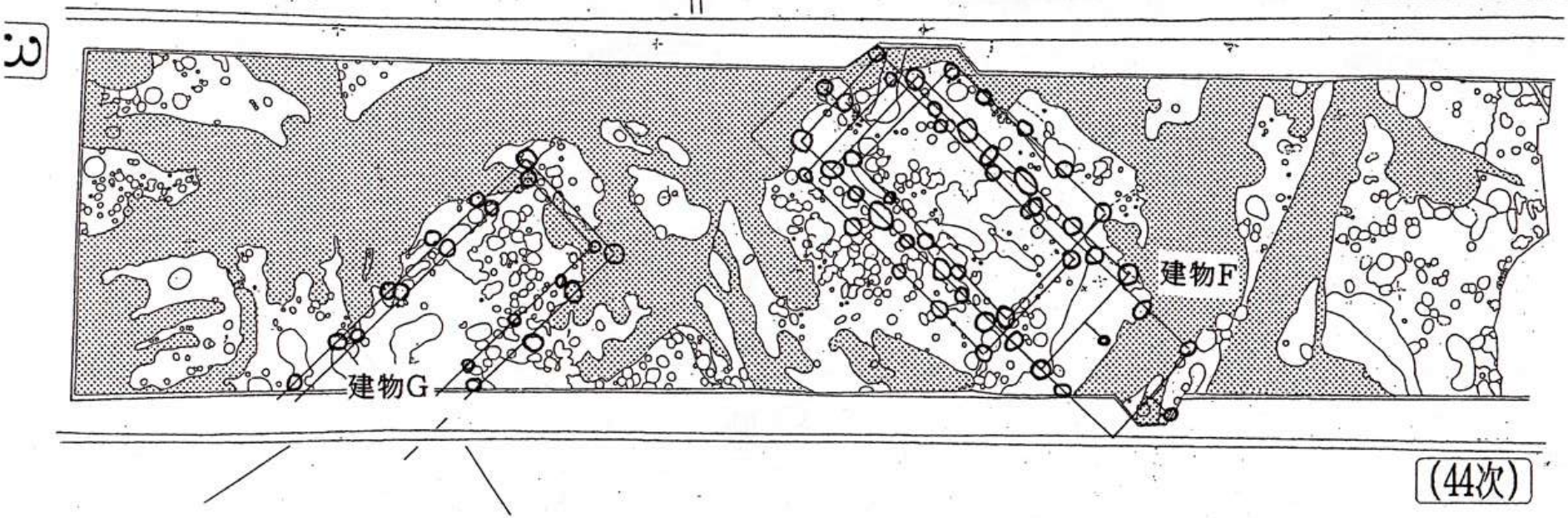
※少なくとも4回以上の建替えが認められる。

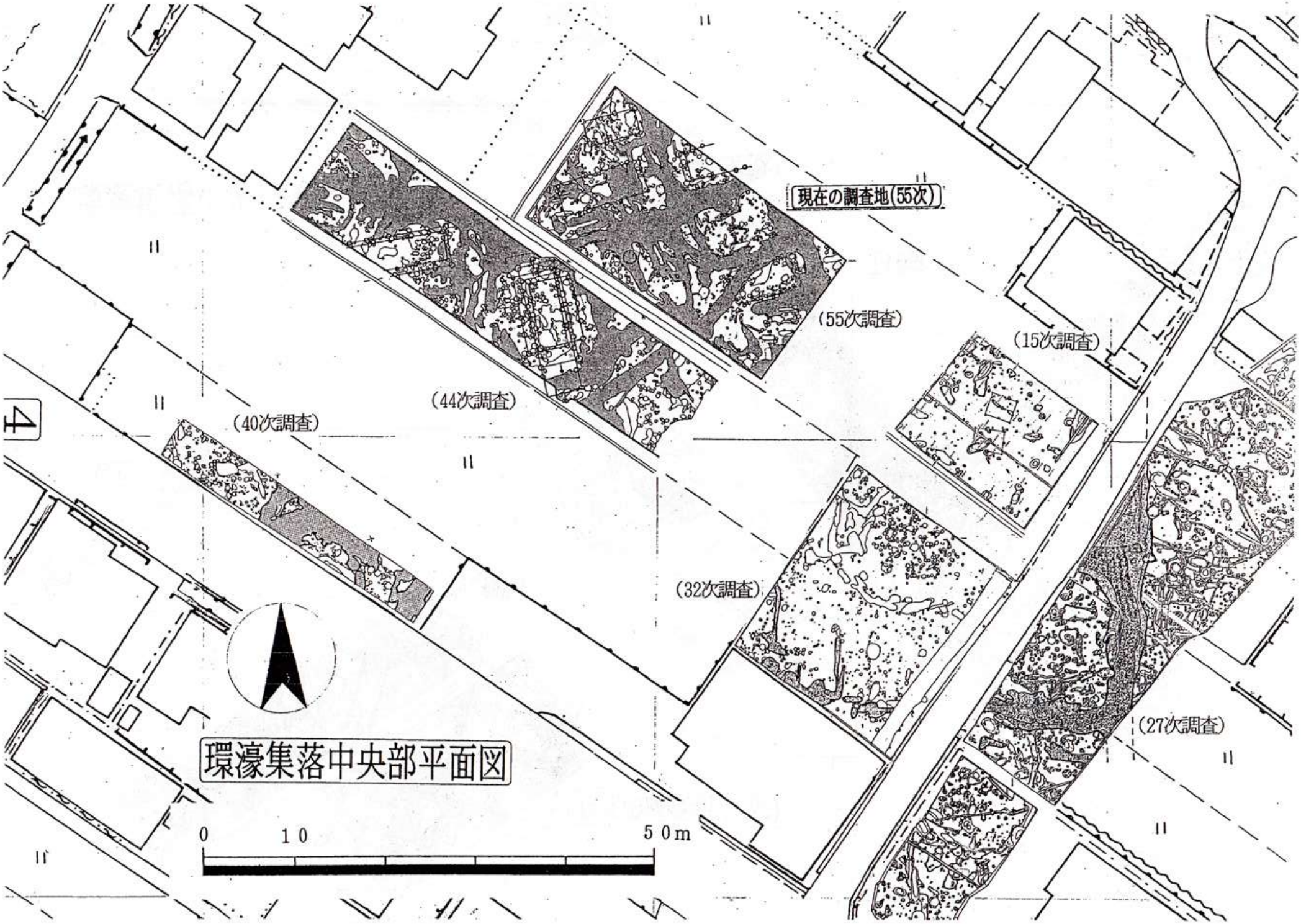
(建物 G)　1 間×5間以上　梁行 4.2m　×　桁行 10m以上

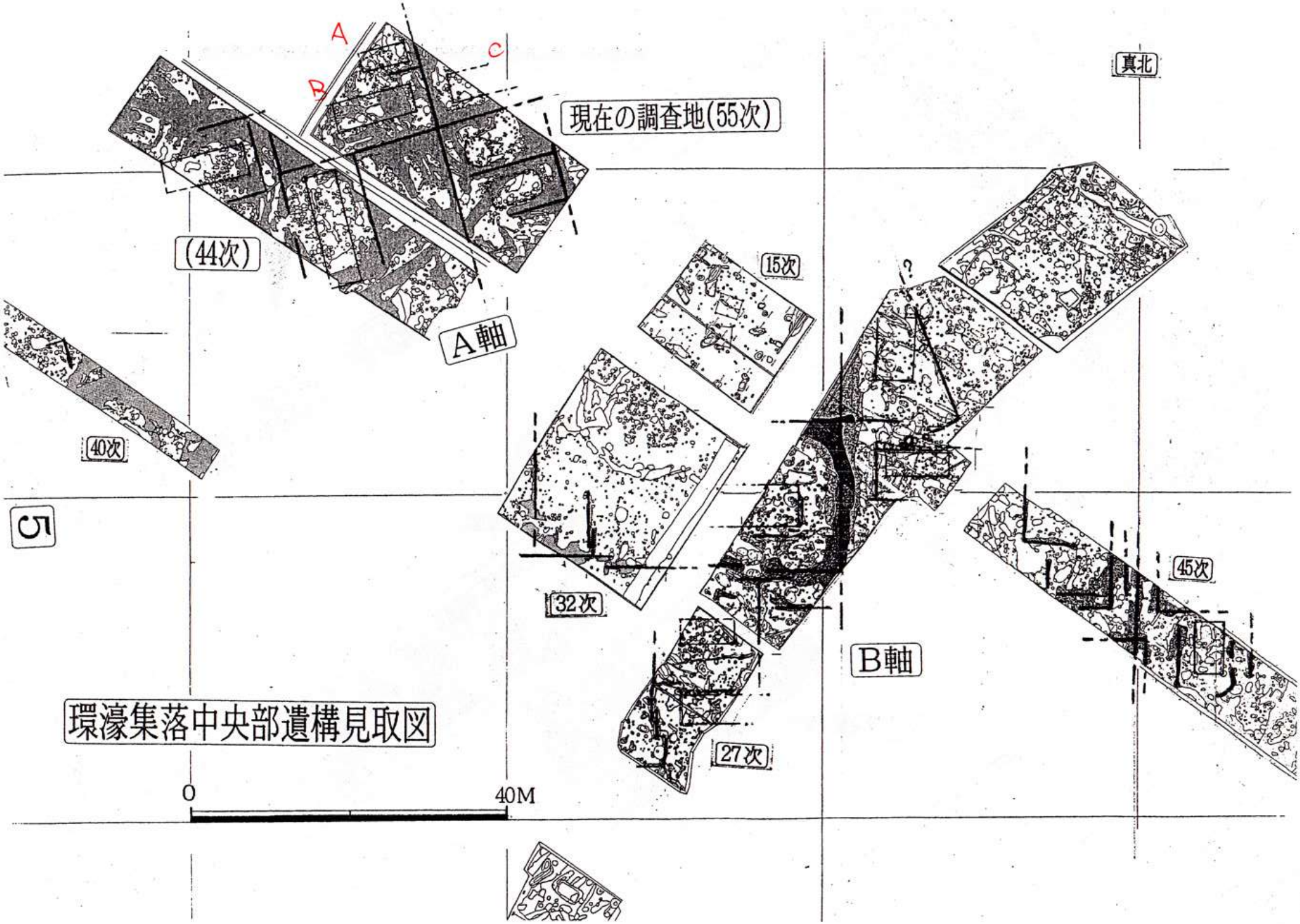
※少なくとも1回以上の建替えが認められる。








現在の調査地(55次)
(55次調査)
(15次調査)
(44次調査)
(40次調査)
(32次調査)
(27次調査)
環濠集落中央部平面図
0
10
50m



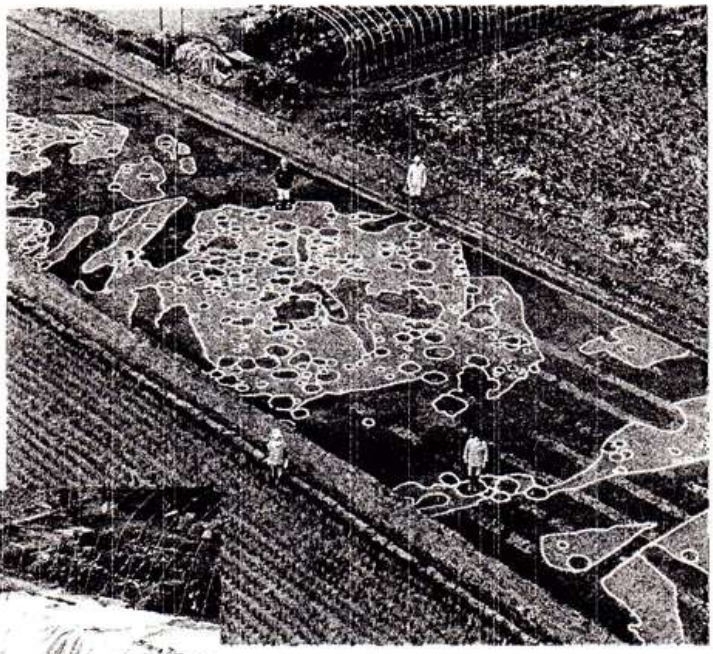
環濠集落中央部遺構見取図

5

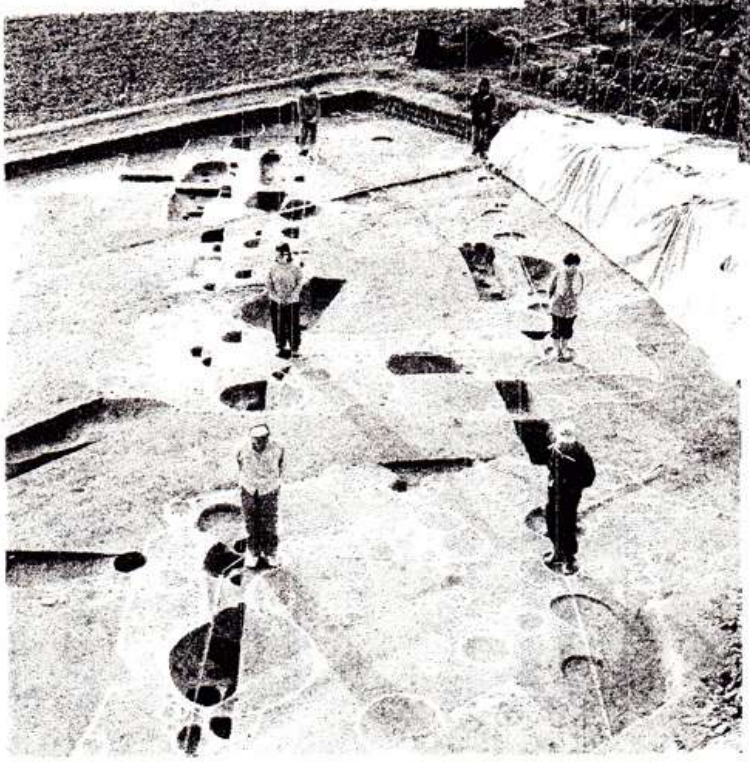
3、まとめ

今回の調査では、環濠集落の中央部やや北西側で弥生時代中期後葉（約2100年前）の建物が少なくとも５棟以上（建物A～E）と井戸跡などが発見されました。建物はA～Cの３棟が掘立柱建物で、D・Eは壁立式建物と推定されます。掘立柱建物A～Cは、桁行（長辺）を東西にそろえて並んでいて、それぞれの建物が数回にわたって建替えを行い、長期間同じ場所にあったと考えられます。そして、建物の周囲には区画溝が配置され、建物と溝がユニットのような状態をなしています。４年前に実施した南西側（44次）の調査区では今回発見された建物の軸線と同じ建物が２棟分発見されていて、この周辺一帯には区画溝を持つ建物が整然と計画的に配置されていることが判明しました。

今回見つかった建物の小区画群では、溝や井戸の中から、まつりに使われたと考えられる大型の壷や台付壷、高坏などが見つかっており、この周辺でまつりが行なわれていた可能性があります。また、検出された溝や建物の軸線は、以前集落中央部で発見された南北溝（区画溝・B軸）と軸線を違えており（別図見取図）、時期差や集落内での役割の違いが空間としてあらわれた可能性もあります。いずれにしても、下之郷遺跡の中央部には方位を意識し、建物や溝を計画的に配置しているということは特筆されるべきことで、巨大環濠集落の中心部の様子が浮かび上がってきました。



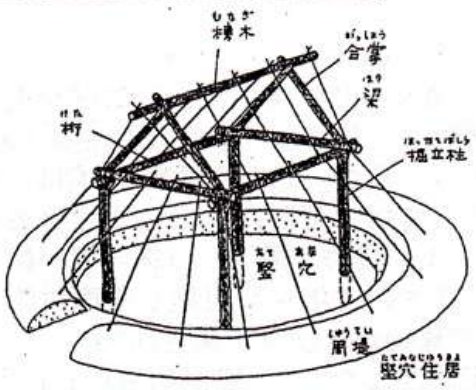
⇒44次調査で検出された大型建物



←今回の調査（55次）で検出された建物

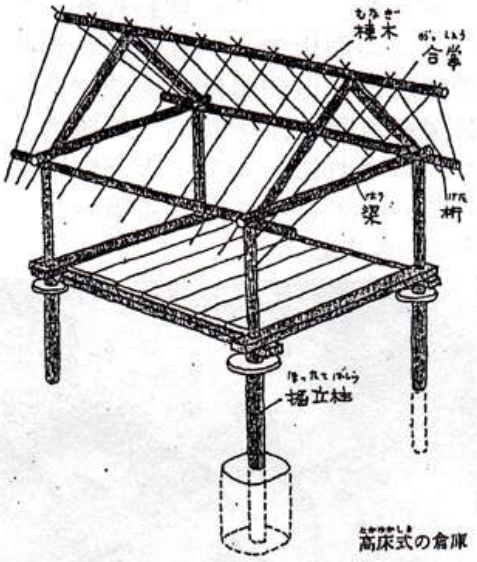
遺構・用語解説図

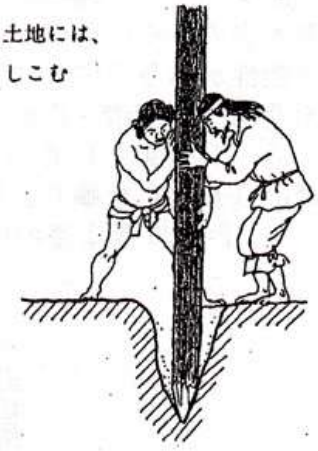
①



石器を使って手掘りで穴を掘る（縄文から弥生時代）

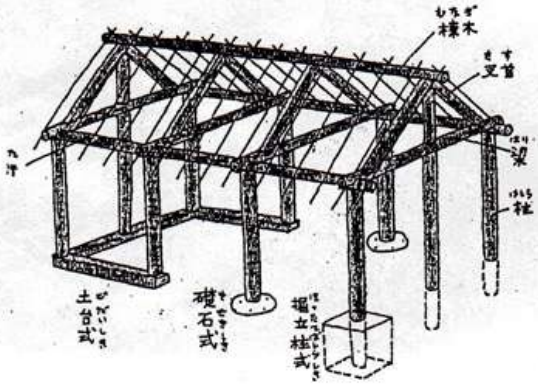
②

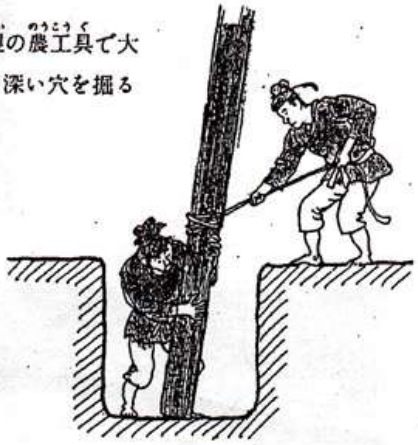




軟らかな土地には、柱を落としこむ

③

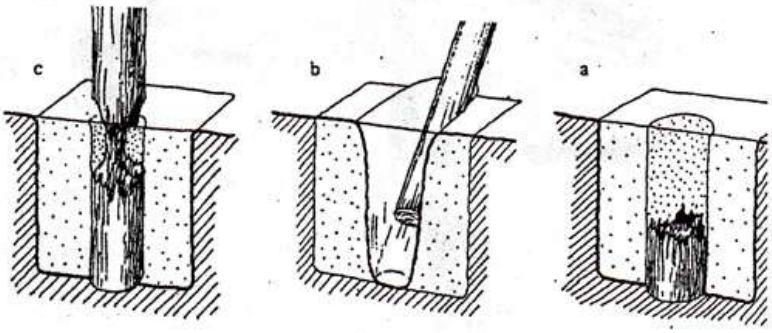




鉄製の農工具で大きな深い穴を掘る

④

昔の柱は、くさって地中に残っている

（下図）

▲ 壁立式平地住居想像復元図
（作図　宮本長二郎氏）